

「いじめ」問題解決のために

イギリスにおける実践的取組みと日英比較調査

平野 恵子

Towards Reducing Bullying in Schools

A Tentative Study for Cross-cultural Comparison on Bully/Victim Problems

Keiko Hirano

I. イギリスにおける実践的取組

1987年、第1回の「ヨーロッパいじめ問題教師会議」がノルウェーにおいて開催された。ノルウェーは、ヨーロッパでも最も早くいじめ問題に注目した国である。ノルウェーで実態調査の研究が開始されたのは1970年代のことであり、問題解決への実践的取組も1982年の相次いで起こった2件のいじめによる子供の自殺事件をきっかけとして、翌83年から教育省の援助の下で全国的規模のキャンペーンとして始められている。その後のノルウェーの状況は、スタヴェンガー地方でのE. Roland, E. Mumtheの1983年から86年までの実態調査、ベルゲン地方でのD. Olweusの83年を起点とする3年間隔の3回に渡る追跡調査などによって着実に把握され、実施された種々の解決策の効果が確かめられるに至っている。第1回ヨーロッパ「いじめ問題」会議の開催は、こうしたノルウェーでの研究と実践の実績を背景とするものであった。

イギリスでの「いじめ問題」への注目と取組は上述の会議以後、これによって触発された形のものであったが、その後の展開は急であった。イギリスの状況が予想以上に深刻で

あると思わせる学校現場からの声や種々の調査結果が集まるにつれ、社会的な問題関心は急激な高まりをみせ、テレビで特集番組が組まれたり、'Britain is "bullying capital of Europe"' (The Guardian, '89. 9. 28.) といったセンセーショナルな論調の記事が新聞紙上にしばしば登場するようにもなった。アカデミックな領域でも、1989年、"Bullying and Victims in Schools" "Bullying: An International Perspective" "Bullying in Schools" という3冊の研究書が殆ど時を同じくして出版されている。そして現在、いじめ克服への実践的取組が、先行のノルウェーでの活動に範をとりつつ、様々な形で広範な広がりを見せて展開され初めているのである。

イギリスにおける実践的取組はその内容も組織も多用であるが、注目すべきこととして、そうした取組が個々の教師や学校の個別の活動に委ねられるのではなく、地方教育当局 (LEA) や大学研究機関、教育心理学者、社会学者、ソーシャル・ワーカー、生徒指導 (パストラル) 担当教師、学校長などによる地域的なサポート・システムの結成という形で行われつつある動向を指摘することができる。そうした取組の具体例の一つとして、シ

ェフィールド大学を中心としたシェフィールド地区でのサーベイ・サービス活動を観てみたい。

このサーベイ・サービス活動は、公的な資金援助を受けてシェフィールド地区の24の小、中学校を対象とし、1990年7月から93年までの3カ年計画で開始されたものであるが、その内容は概略次の様な3つの活動で構成されている。

1つは、各学校のいじめ問題状況を客観的に診断すること、そしてその結果即ち各学校のいじめ状況の程度、様相を個別に通知することである。この診断の手段としてノルウェーのD. Olweusによって作成、使用されてきた質問紙の英訳版が採用されている。それは、同一の尺度を使用する事でノルウェーでの結果との直接的比較が可能となり、単にシェフィールド内部の比較に留まらないより広いより客観的な視野から、各個別の学校の問題状況の水準と特性が査定できるようになるという理由による。いじめの実態把握の方法としては他に面接調査、観察、教師および児童生徒の報告などが考えられるが、この計画実施に先立ってシェフィールド大学のP. K. Smithらは、これらの方法全てを併用して予備調査を行った結果、「いじめ」のような隠蔽あるいは誇張が付きものである問題には、匿名の質問紙調査がもっとも妥当であろうとの結論を得ている(Ahmad and Smith, 1990)。

この計画下の調査は1990年11月に実施され、その結果が91年5月末に各学校に通知されて、計画の第1段階はすでに終了している。

サーベイ・サービス計画の第2段階は、各学校の実情に応じたいじめ対策をアドバイスし、その実施を援助することである。現在様々ないじめ克服の為の試みがシェフィールド地区および地区の諸学校で開始されている。例をあげるなら、いじめ被害を受けている児童生徒のためのサポート・グループ(専門的

な指導者の下で、ディスカッション、ロール・プレイ等種々の集団活動を通して、自尊感情の回復、ソーシャル・スキルの育成などを図る小集団)、教師のためのいじめ対処法訓練(主としてロール・プレイの技法によっていじめ被害児、加害児の扱い方を訓練)、学校法廷“School Court”(いじめを裁く生徒の自治活動。いじめ加害者を罰する事が目的ではなく、いじめ事件の秘密主義的傾向を打破して学校全体を“telling school”に変え、当事者のみならず全ての生徒の共通の関心を喚起するための試み。この興味ある試みはシェフィールド計画開始に先立つ1990年1月から7月までWybourn First and Middle Schoolで試行され、その方法手続、問題点、効果の可能性などが吟味されて後、計画に加えられた)、いじめに関するビデオフィルムなど各種教材の貸与(パストラル等の授業で活用し、児童生徒のいじめ行為に対する一般的態度の変容を図る)といった活動が現在進行中である。

サーベイ・サービス計画の最終段階は、計画開始後3年目の1993年に予定されている同一質問紙による状況診断調査である。この調査結果が第1回調査と同様直ちに各学校に伝えられ、地域的な援助のもとで行った自らの実践的取組の効果を各学校に知らされることになる。

以上の様なシェフィールド地区と同様の地域ぐるみの取組みは、例えばダービシャー、ノッティンガムシャー等にも見ることが出来るが、シェフィールド計画の最要点は、個々の学校の問題状況のレベルを客観的に指示し得るような尺度を使用しての実態調査をその基礎に据えているという点である。いじめはしばしば水面下の出来事である。加えて、いじめ、いじめられる人間関係がいかなる人間集団にも多少なりとも見出される普遍的な現象とも言えることが、いじめ問題についての曖昧な主観的自己診断をきわめて危険なもの

にしている。これぐらいはあって当たり前と
いった過少評価、逆に過大な評価、過剰な不
安動揺もまた生じがちなのである。シェフ
フィールド計画は、こうした危険性を回避し、
出来得る限り客観的な自己認識に基づく取組
を援助する試みとして評価することが出来る
であろう。

II. 日英比較調査

1. 目的と方法

(1) 調査の目的

我が国に於けるいじめ問題への注目と取組
は、イギリスより遥かに早い時点から始まっ
ている。1980年頃から問題の重大性が指摘さ
れ始め、84年には文部省が「児童の友人関係
をめぐる指導上の諸問題」と題する手引書を
全国の小学校に配付するとともに、継続的な
実態調査の実施を決定している。社会的な関
心も、自殺、仕返しの殺人や放火などのいじ
め事件が多発した84年から85年頃にピークに
達し、アカデミックな調査研究もこの時期即
ち85、86年頃に集中的に行われている。そし
て1991年現在、文部省によって、いじめ事件
は年々減少しており事態は鎮静化した、との
見解が示されるに至っている。

このように我が国の取組みと論議の歴史は
ほぼ10年間の長さを持っているのであるが、
この間我々に欠けていたものは、イギリスの
シェフィールド計画に見られるところの常に
事態の客観的把握、自己認識を基礎にする
という視点でなかったかと思われる。確かにこ
れまで数多くの実態調査が行われてきている
のではあるが、それらは相互に異なる方法、
スケールを使用しており、このことが多量の
データの相互比較によってのみ得られるので
あろうより客観的な事態の判断を阻んでいる。
今回の「事態は鎮静化した」との文部省見解に
しても、文部省全国調査の過去のデータから
の判断であり、鎮静化の傾向にあるとは言

得ても、現在の水準を以て通常レベルに達し
たと看做しうる何か普遍的な基準があるわけ
ではない。こうした疑問に基づいて本調査は、
シェフィールド調査と同一の質問紙を使用す
ることによって、それが日本のいじめ調査の
スケールとしても利用しうるものであるか否
かを吟味検討すると同時に、ノルウェー、イ
ギリス（主として1989年に実施されたシェフ
フィールド予備調査）のデータとの直接比較を
通して日本のいじめ状況のレベルの査定とい
じめ問題の日本の特性の探索を試みることに
し、そしてより客観的より深い自己認識を可能に
する通文化的比較研究のための基礎資料を提
供する事をその目的とするものである。

(2) 方法

①調査対象

埼玉県北本市の小学校2校、5、6年生293
名（男子155、女子138）、桶川市の中学校2
校、1、2、3学年生423名（男子221、女子
199、性別不明3）。各校各学年2学級づつ、
計20学級。

②実施の方法、時期

学級単位の集団施行。実施時期は1991年2
月末～3月上旬。

③質問紙

ノルウェーのOlweus（ベルゲン大学）が
作成し、シェフィールド大学のP. K. Smith
が英訳したものを日本語に翻訳。小学生用、
中学生用があり、中学生用にいじめ性向を問
う1項目が追加されていること、休み時間
に対する感情を問う項目といじめ、いじめられ
体験に関する質問の選択肢の違いがある事を
除いて、内容はほぼ同一である。小学生には
調査実施者が教示書を読上げ、解答方法の指
導を行った。

いじめ調査では、被調査者の警戒心を解く
事と何をいじめと考えるかの共通理解を持た
せる事が重要である。そのため、質問紙は匿
名としてプライバシーを守る事を確約し、共

通理解の為には、Olweus の質問紙と同一の次の様な説明を付記した。

いじめとは、個人または集団で、他の人に意地の悪いことや不愉快なことを言うことです。なぐる、ける、おどす、部屋の中にとじ込めてしまう、仲間外れにする、などもいじめです。何度も繰り返す、意地の悪いやり方からかうのもいじめです。

でも、同じくらい体力の子供が二人で、面白半分を取っ組みあったり口げんかする事はいじめではありません。

2. 結果と考察

(1) いじめ被害体験、加害体験

「今学期中に学校でいじめられた(いじめた)ことがどのくらいありましたか」という質問で、いじめ被害、加害体験の有無、頻度をたずねた。選択肢は、1)なし、2)ほんの1度か2度、3)ときどき、4)週に何度か(中学生用では、4)週に1度ぐらい、5)週に何度か)である。1)と2)を非体験者、「ときどき」以上を体験者とし、「ときどき」を軽度、週

1度以上を重度体験者と分類して考察する。なお、今学期中という限定があるのは、本質問紙が本来実践的目的を持つもので、指導の効果を測るスケールとして比較的短期間に繰り返し施行される場合を考慮した為である。

表1は、本調査で使用したものと同一の質問紙による調査の結果である。ノルウェーの結果はOlweusによるもので、この表に示された結果は様々ないじめ解消の指導が為される前の数値である。アイルランドの結果はO'More and Hillery (1989) (小学生のみ)、スコットランドのデータ(中学)は、Meller (1990)、イングランドヨークシャー調査はSmith et al (1989)、イングランドシェフィールド予備調査(中学2校、サンプル数234)はSmith et al (1989)、シェフィールド全域調査(小、中計24校、全サンプル数6,758)は、同じくSmithらによって行われたサーベイ・サーヴィス計画における第1回調査で1990年11月実施されたもの。日本の数値は本調査の結果である。本報告では主として、中学生のみを対象としたシェフィールド予備調査のデータを日英比較分析の対象とし考察す

表1 いじめ問題発生状況

	NORWAY (Vergen)	IRELAND (Dublin)	SCOTOLAND (two region)	ENGLAND			JAPAN (埼玉県)
				(S.Yorkshire)	(Sheffield) <予備調査>	(Sheffield) <全域調査>	
いじめ被害体験							
小 時々	7~12%	—	—	20.1%	—	17%	11.1%
学 週1度	3~7%	8.0%	—	6.0%	—	10%	3.8%
校 以上							
中 時々	5~6%	—	6%	17.7%	12.0%	6%	6.4%
学 週1度	2~3%	—	3%	7.5%	9.8%	4%	4.0%
校 以上							
いじめ加害体験							
小 時々	6~8%	—	—	8.4%	—	8%	11.5%
学 週1度	2~4%	2.5%	—	1.7%	—	3%	0.3%
校 以上							
中 時々	5~8%	—	4%	10.3%	8.1%	5%	8.6%
学 週1度	2~3%	—	2%	3.3%	4.3%	1%	5.3%
校 以上							

る。なお、比較に当たっては便宜上、日本、イギリスという表現を使用するが、データの代表性を確認した上での表現ではないことはいうまでもない。

① いじめ被害体験

図1は、いじめ被害を「時々」以上の頻度で経験した者のパーセンテージを学年別、小中別に示し、それにシェフィールド予備調査の結果（以後S予備調査と略す）を合わせて図示したものである。

図1によると、本調査の対象となった小学生の15%弱、中学生の10%強がいじめ被害体験者である。この比率を表1に示された他国の数値と比較すると、ノルウェーの数値に近似し、イギリスよりは低いという結果となっている。図1ではイギリスS予備調査の中学生のデータが図示されているが、それによると日本の中学生の約2倍にあたる22%といういじめ被害体験率が示され、かなり深刻なイギリスの状況を示唆している（S予備調査と日本の差は、 $\chi^2=14.81(2)$ $P<.001$ で有意）。

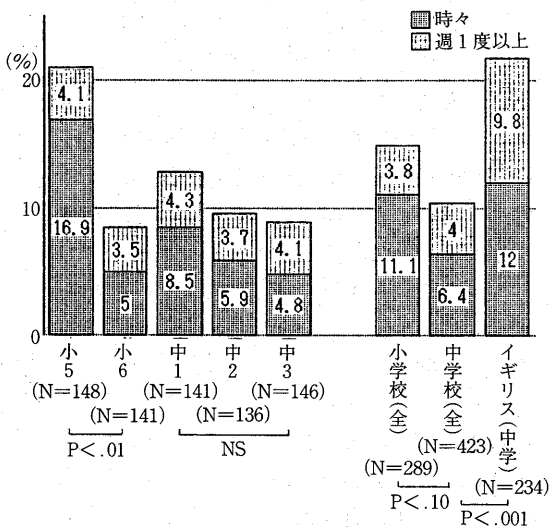
以上の結果で見ると、日本のいじめ問題はかなり低い水準にあると言えそうである。しかしノルウェーの数値が、いじめ解消の意

識的取組みがなされる以前の、したがって高率とみなされた数値である事、シェフィールドが人種問題を抱えた大工業都市であるのに対し本調査の対象校は比較的のどかな近郊小都市にあり、また久しいいじめが問題視されてきて一応事態は鎮静化したと言われる時点での調査であることを考えると14.9%、10.4%という数字をどう受け止めるか、大きいとするべきか、小さいと安心すべきか、慎重であるべきかもしれない。シェフィールド大のP. SmithとY. Ahmadは、規模、人種構成、地域的特性を異にする学校をヨークシャー地方から3校、ロンドンから1校選び出し探査的な調査を行った結果、かなりの学校差の存在を確認している。24校を対象としたシェフィールド全域調査の数値が10%（中学）に下がっていることをみても、地域、学校規模等を配慮してのさらに大規模な調査が我が国においても必要であろう。

図1によれば、いじめ被害体験の学年差は、小5と小6において著しい。小5の数値が、0.5%水準で有意に大である（ $\chi^2=20.14$ $df=2$ ）。中学では学年差は見出されていない。小学生と中学生とでは、小学生の頻度がやや高い傾向があるが（ $\chi^2=4.97(2)$ ）、これは小5の極端な数値の影響を受けての差と思われる。小5では全体の21%の子供が時々以上の頻度でいじめられたと答えているが、週1度以上の深刻ないじめ被害体験者は4.1%で、この比率は小中共、全学年を通じてあまり変わらない。この4%という数字に着目すべきかもしれない。

いじめ被害体験の性差は、中学生に於いてのみ有意であった（ $\chi^2=16.06(2)$ ）。中学男子の15.8%が今学期中「時々」以上の頻度でいじめられた事があると答えているが、女子生徒は遥かに少なくわずか4%である。イギリスではいじめ被害に関する性差は見出されていない（S予備調査では、男子20.9%、女子22.7%）。

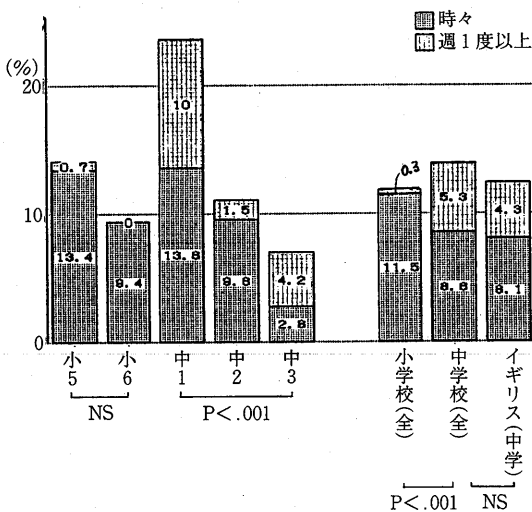
図1 いじめ被害体験



② いじめ加害体験

既述のように日本での今回の調査では、いじめ被害体験者の率が他国に比較して低率で、日本のいじめ状況はさほど深刻ではないと思わせるものであったが、いじめ加害体験率で見ると、問題はもう少し複雑なようである表1および図2によると、小学生の場合はいじめられ体験、いじめ体験共に他国とほぼ差はないが、中学生の場合は、いじめ被害体験率では2倍以上の数値を示したS予備調査と、いじめ加害体験率は同レベルでむしろ僅かながら高いという考えさせられる結果になっている。この様相は表1の様々な地域での結果との比較においても指摘でき、本調査中学の14%といういじめ加害率は、表中最も高い数値である。またいじめ加害体験率が被害率を上回るというのも他に見られない日本独特の傾向の様に見える。これが何を意味しているのか現在の所正確な判断を行うのが手掛かりはないが、1. 日本の中学生の間には集団いじめの傾向がある。2. 日本の中学生には、いじめられたことを明らかにしたくない(警戒心が強い、あるいは“いじめられっこ”というレッテルを自ら貼りたいくない)という思い

図2 いじめ加害体験



がより強い。そして“いじめっこ”には“いじめられっこ”ほどネガティブなイメージがなく、比較的気軽にいじめたことを表明できる。以上2つが考えられようか。

図2によると、いじめ被害体験の場合とは逆に、小学生に学年差が見られず、中学生の学年差が有意であった。 $(\chi^2=22.078(4))$ 。中1のいじめ加害体験率が顕著に高く、被害体験率も12.8%とかなりの高率であったことを考えると、かなり深刻な状況が中1の学年段階にありそうである。中2、中3といじめ加害体験率は減少している。

小学生全体と中学生全体を比較すると、いじめ被害体験の場合とは逆に、中学生の方が加害体験率は高い $(\chi^2=14.146(2))$ 。しかも週1度以上いじめをしたと答えた重度体験者は、小学生では0.3% (1名) にすぎないのに対し、中学生では5.3% (22名) となっている。1人の子を数人で繰り返しいじめるといふ弱いものいじめの状況が出てくるのは中学段階でなのだろうか。

小、中、全体を通していじめの加害者は、主として男子である。小、中合わせて「時々」以上の頻度でいじめに加担した事があると答えた子は、702名中、92名でそのうち女子12名に過ぎない。この性差の様相は、イギリスS予備調査の結果でも同じである。(小、中、イギリス中学の性差、全て0.5%水準で有意)。

1、2度いじめられた事があると答えた軽微なものを含めた全いじめられ体験者について、いじめ加害者の性別をたずねた設問の解答を調べたところ、表2の通りであった。

表2から明らかなように、男子がいじめられるのは専ら男子によってである。女子の場合は、小学生段階では、男子に、女子に、男子と女子にいじめられたという解答がほぼ同率であるが、中学生女子では男子と同様、同性間のいじめという形がはっきりと出ている。イギリスS予備調査の中学生の場合は、男子

表2 いじめ加害生徒の性別 (%)

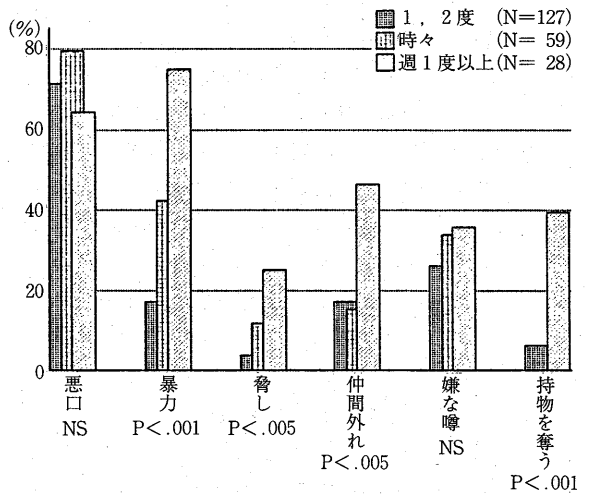
被害生徒		男子に	女子に	男子と女子に
小学生男子 N=66		75.0	7.8	17.2
小学生女子 N=61		31.0	36.2	32.8
中学生男子 N=61		80.0	1.7	18.3
中学生女子 N=26		12.0	78.0	12.0

は同性間いじめ（いじめたのは男子と答えた者88%）であるが、女子は異なる（男子に、48%，女子に、24%，男子と女子に、28%）。この傾向は、シェフィールド全域調査でも再度確認されている。年長になるにつれ性による分化が進行する日本の子供集団との相違を反映した結果といえよう。

③ どのようにしていじめられたか

本調査ではいじめの方法を7項目（英語版から人種差別に関する1項目を除外）を示し、どの様にしていじめられたか当てはまるもの全てを選択するように求めた。軽微なものを含めて何等かいじめられたことがあると答えた全児童生徒のデータについてみると、いじめのタイプで圧倒的に多いのは、「悪口を言われた」で、72.8%，続いて「なぐられたり、けられたりした」という肉体的暴力、31.9%、「いやなうわさをながされた」29.1%、「仲間はずれにされた」20.7%、「持物をとられた」13.6%、「おどされた」8.9%となっている。イギリスS予備調査でも、最も多いいじめのタイプは「悪口」で、その割合も71%と日本の結果に近似している。2位が肉体的「暴力」であるのも同じであるが、その率は12%と予想に反して日本より低い。日本のいじめは心理的という事がよく指摘されるが、それはアメリカの暴力的状況と比較した時に言い得る事かもしれない。持物を奪う行為が日本では13%となっているのに対し、イギリスでは2%にすぎない。この設問がイギリスの子供にとっては金品の強奪を意味し、日本の子の場合には、物を隠されたりという、か

図3 いじめられ頻度といじめられ方



らかいに近いものを含で理解されたのかも知れない。

いじめタイプに見出された統計的に有意な性差は、暴力（イエーツの $\chi^2=25.79(1) P<.001$ ），仲間はずれ（イエーツの $\chi^2=7.12(1) P<.005$ ），脅し（イエーツの $\chi^2=4.18(1) P<.05$ ）の項目に関してであった。「暴力」「脅し」のいじめは男子に多く、「仲間外れ」は女子に多い。

図3は、いじめ被害体験頻度別のいじめられ方の様相を示している。いじめが1, 2度と言った軽いものの場合、大半が「悪口を言われる」といういじめられ方であるが、いじめられの頻度が高まるにつれ、いじめの方法も多様化する傾向がみられる。暴力、脅し、仲間外れ、持物をとられるの4タイプに0.5%水準で統計的に有意ないじめられ頻度に関連した偏差が生じている。

④ どこで、だれにいじめられたか

どこでいじめられたか、という質問に対する解答の殆どが、小、中共に、「教室」であり、校庭や廊下と答えた者は10%程度に過ぎなかった。この結果と関連して、誰がいじめたかという質問でも圧倒的に多いのは「同じクラスの子」（小学生91.8%，中学生73.8%）

であった。S予備調査のイギリスの中学生の場合は「同じクラスの子」35%、「同学年の他のクラスの子」31%、「ちがう学年の子」34%となっている。日本のいじめは、学級という小集団内の出来事と言えそうである。またイギリスでS予備調査、S全域調査ともいじめの場所は「校庭で」が最も多い。このようにイギリスでは、いじめ事件が教師の目の届かないクラスの壁を越えた出来事である傾向が強いことから、校庭監視員の訓練や派遣といった対策が重視され、実施されているのである。

⑤ いじめられた事を誰に話したか

図4-1、図4-2は、「時々」以上の頻度でいじめられた事があると答えた児童生徒について、その事実を先生、家族に告げたか否かをたずねた結果を図示している。図4-1によると、先生への告知率は概して低率である。統計的有意差はないが、日本の中学生の告知率が最も低い。いじめられたことを家の人の誰かに話した者は、小学生では先生へ

の告知率を上回って42.5%であったが、中学生では逆に減少して18.6%となっている。イギリスのS予備調査の中学生の場合は、41%が家族の誰かに訴えており、中学生に関する日英の差は有意であった(イエーツの $\chi^2=4.564(1)$)。

図4-2によれば本調査対象の日本の中学生は、いじめ被害にあっている子の70%が、先生にも家族にもその事実を告げていない(小学生の場合は55%)。「週1度以上」の重度のいじめ被害者の場合でも、話さなかった者は、小学生では10名中2名であるのに対し、中学生は16名中8名と中学生の沈黙傾向が顕著である。

⑥ いじめた事を誰と話合ったか

「時々」以上の頻度でいじめ行為をした子のうち、小学生では71%、中学生では82%が、先生とそのことで話合った事はないと答えている(図5-1)。イギリスS予備調査の中学生は日本の中学生より話合う事が多いが、その差は統計的に有意ではない(イエーツの

図4 いじめられた事を話したか

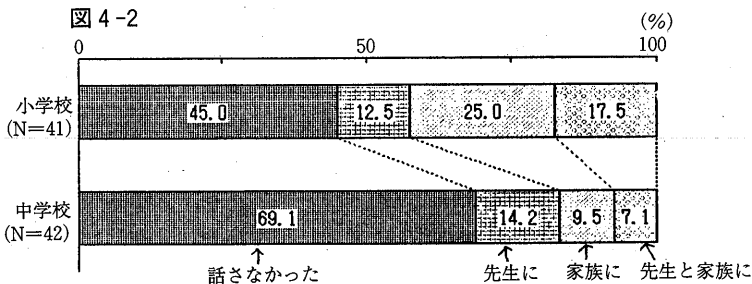
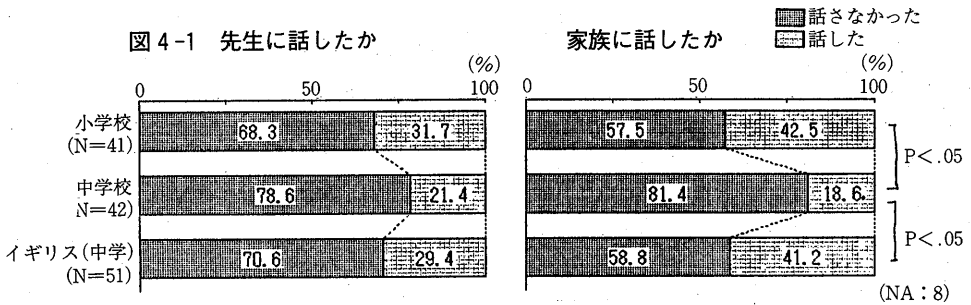
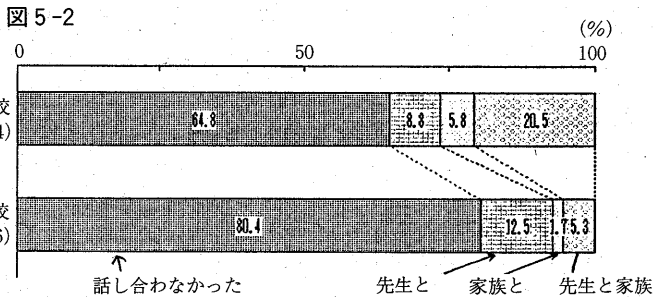
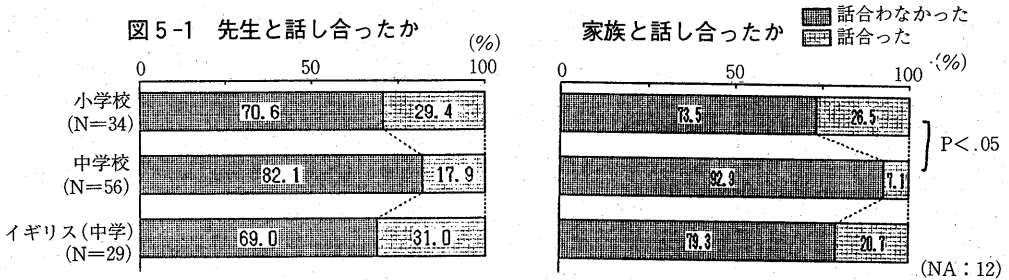


図5 いじめたことについて話し合ったか



$\chi^2=0.406(1)$. いじめ行為についての先生と当事者との間の話し合いは、いじめの程度とも関連すると考えられるが、週1度以上の頻度でいじめたと答えた子供で先生と話し合ったのは小中合わせて、22名中の僅か2名であった。家族との話し合いはさらに少ない。小学生の方が中学生より家族と話し合ったという答えが多いがそれでも26.5%に過ぎず、中学生では僅か7%であった(小, 中の差, イェーツの $\chi^2=4.927(1) P<.05$). 日本の中学生はイギリスの中学生より、家族との話し合いも少ない。

友達をいじめたことのある小学生の65%、中学生の80%が、先生とも家族とも話し合いはしていないと答えている(図5-2)。

(2) 学校生活への適応といじめ

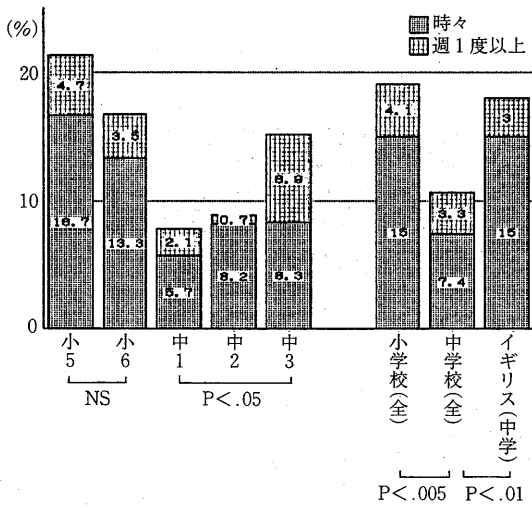
本調査対象の子供たちは小学生も中学生も良く学校生活に適応しているようである。クラスに仲の良い友達が何人ぐらいいるかという問には、70%以上の児童、生徒が「たくさんいる」と答えているし、休み時間が楽しい、

好きとする子は、小学生92.1% (楽しい36.5%, とても楽しい55.6%), 中学生80.6% (好き30.5%, とても好き50.1%)となっており、小, 中では設問が異なるが、いずれも休み時間をポジティブな気分で楽しく過ごしている様子が見える。

本質問紙では「今学期中、休み時間に一緒にいてくれる人がいなくて、ずっとひとりぼっちだったことがありますか」という質問項目が設けられているが、これは作成者のOlweus自身が、「間接的いじめ Indirect bullying」と呼んで問題視している状況を調べるためである。本調査の結果を、いじめ被害、加害体験の場合と同様の手続で分類、分析し、図示したのが図6である。

学年差は、中学のみ有意である($\chi^2=10.17(4)$)。その様相は、いじめ被害体験、いじめ加害体験の場合とは逆に、学年が上がるにしたがって体験率が上昇するという形になっている。いじめられ13%, いじめ24%という高い数値を示した中学1年生がOlweus言

図6 休み時間のひとりぼっち体験



う所の「間接的いじめ」体験率では約8%であるのに対し、9%、7%という低水準のいじめ状況を示した中学3年生が、3学年中もっとも高い15%という数値を出しており、興味深い。中学生より小学生の方が、ひとりぼっちを体験した子が多い ($\chi^2=11.26(2)$)。イギリスとの比較では、日本の中学生の方がイギリスより少ない ($\chi^2=9.51(2)$)。

性差は全体ではさほど明確ではなかったが、中学生の場合男子の方にひとりぼっち体験が多い有意な傾向があった(男子221名中61名、女子199名中26名) ($\chi^2=13.47(1) P<.005$)。

図7, 図8, 図9は、いじめられ頻度と、①仲よしの友達数, ②休み時間の楽しさ, ③ひとりぼっち体験頻度の3変数との関連を示

図7 いじめ被害体験×仲のよい友達

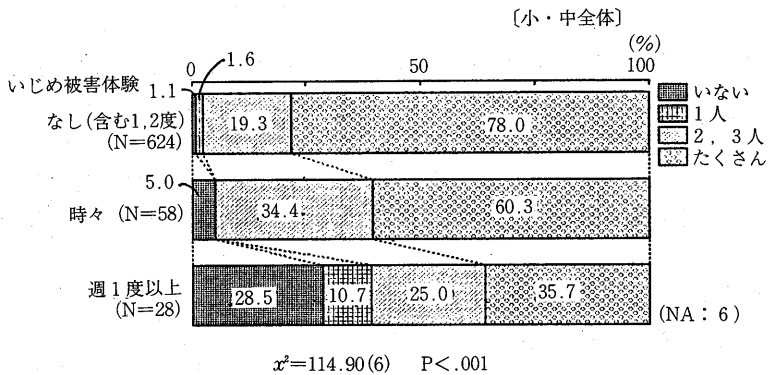


図8 いじめ被害体験×休み時間の楽しさ(好悪)

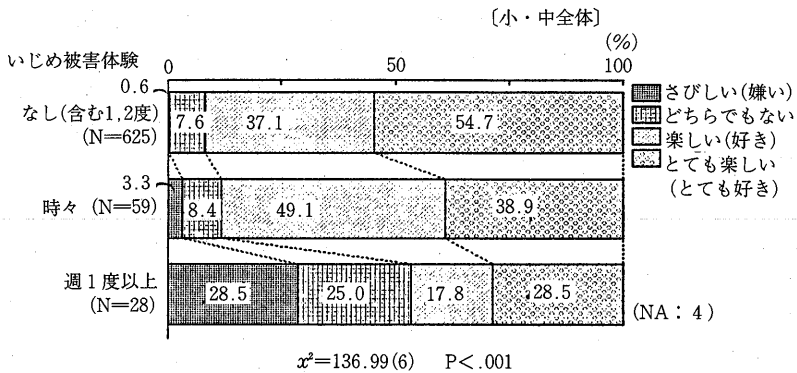
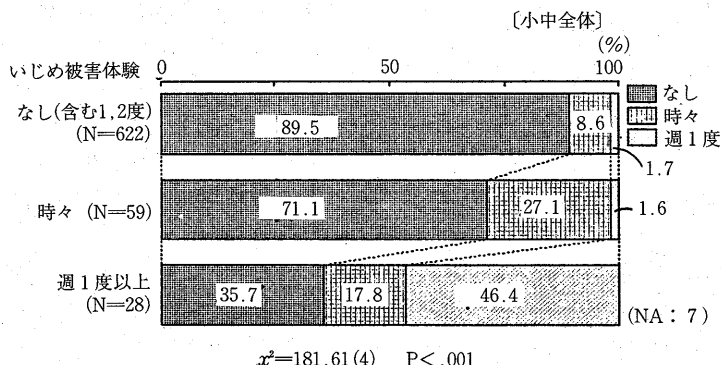


図9 いじめ被害体験×休み時間のひとりぼっち体験



したものである。明らかにこれら3変数それぞれといじめられ頻度との間には強い関連がある。2変数間の関連の程度をクラメルの関連係数で見ると、いじめられ頻度と仲よし数とは0.28、休み時間への感情とは0.31、ひとりぼっち頻度とは0.36である。すなわち、図から理解されるように、いじめられることの多い子供ほど、仲よしの友達が少なく、休み時間が楽しくなく、休み時間を1人で過ごす事が多いという経験的にも首肯しうる傾向が確認された訳である。ちなみに、「いじめっこ」の方には、こうした関連は全くなかった(クラスメルの関連係数を示すと、いじめ加害体験頻度と①0.07、②とは0.08、③とは0.08)。イギリスS予備調査の結果では、いじめられ頻度とひとりぼっち頻度との間には正の関連が見出されたが ($P<.05$)、いじ

められっこは友達が少ないとか、休み時間が嫌いという傾向は特になかった。この辺にいじめ問題の日本の特徴があるかもしれない。

(3) いじめへの対応

①先生

先生がいじめをやめさせようとする事がどのくらいあったかという質問で、児童生徒の認知した教師の対応行動を調べた結果を、小中、イギリスS予備調査別にグラフ化したのが、図10である。子供の目に映った教師の制止行為は、日本の中学が「時々」「いつも」合わせて16.6%と最も少なく、イギリスS予備調査の57.6%と大きく隔差を示している ($\chi^2=128.14(3)$)。「分からない」という解答が50%を越えているのも日本の中学生の特徴である。教師の対応行動に対する子供の認知

図10 いじめへの対応：教師 (先生はいじめを止めたか)

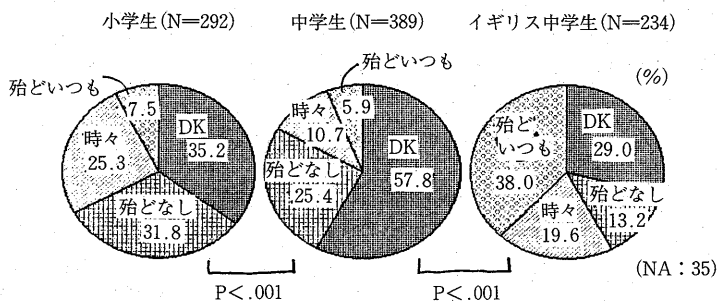


表3 いじめ被害体験と教師の対応行動への認知

いじめ被害体験		先生はいじめを		D.K.
		とめる	とめない	
なし(含,1,2度)	N=590	23.6	26.4	50.0
時々	N= 59	28.8	28.8	42.4
週1度以上	N= 28	17.9	60.7	21.4

数字は% $\chi^2 = 17.24(4)$ $P < .005$ (小中全体)

はいじめ発生状況と関連するであろうから、イギリスS予備調査の発生状況が22%という深刻なものであった事を考えればこの結果は当然であり、日本の中学でのD.K.解答率の高さもこれで説明がつくとすることも出来るかもしれない。しかし日本の中学生と同率の10%のいじめ発生率を見出したイギリスS全域調査の結果でも、予備調査同様、50%以上の生徒が、先生はいじめを止めると答えている(P.K. Smith 1991.5.)。日本はイギリスに比較し、いじめへの教師の関与の度合いが低いとすべきなのであろうか。

教師の対応行動への児童生徒の認知は、いじめ被害、加害体験の有無、頻度と関連するであろう。小中合わせた全データについて検討した所、いじめ被害体験との有意な関連が確認された(表3)。

いじめ被害体験「なし」および「時々」の軽度体験者には、「分からない」という反応が多くみられ、週1度以上の深刻な苛めを体

験している子供の場合には、その60% (28名中17名)が、先生は苛めを「とめない」とし、「とめる」は18% (時々とめる4名、いつもとめる1名)と他と著しく異なる反応傾向を示している。この結果は教師の実際の行動そのものよりは子供の側の期待と実際のズレの大きさを反映したものであるのかもしれない。

②友達

図11は、子供同士が見た児童生徒の対応行動の状況を調べた結果である。

教師の制止行動の場合と同様、生徒同士の制止行動も、イギリスと比較すると日本は顕著に少ないようである。イギリスでは、S予備調査、S全域調査いずれも半数以上の生徒が、他の子がとめようとする答えているのに対し、日本では、小学生33%、中学生23%でしかない。しばしば指摘されている容認、傍観、無関心という日本のいじめ問題の特性を想起させる結果である。

いじめ被害、加害体験と友達の対応行動への認知とのクロス分析では、教師の制止行動に関する場合とは異なって、いじめ加害体験との有意な関連が確認された(表4)。

非いじめ加害体験者の場合は、「わからない」が多く、「時々」の軽度いじめ体験者の場合は「とめる」、週1度以上の頻度でいじめをした子の場合には、「とめない」が最も多い。頻繁ないじめ行為の発生には、教師の対

図11 いじめへの対応：友達
(友達はいじめを止めたか)

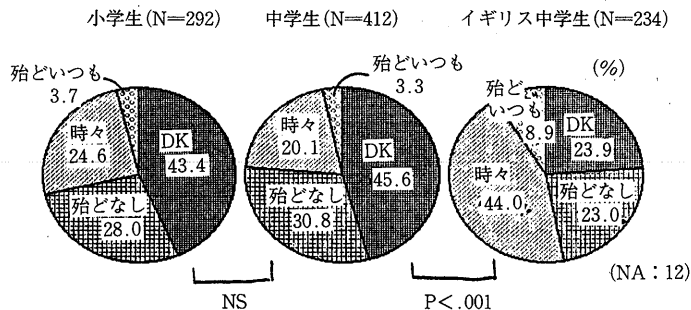


表4 いじめ加害体験と友達の対応行動への認知

いじめ加害体験	N	他の子はいじめを		D.K.
		とめる	とめない	
なし(含,1,2度)時々	N=603	23.7	29.2	47.1
週1度以上	N= 69	39.1	26.1	34.8
	N= 23	26.1	60.9	13.0

数字は% $\chi^2=21.06(4)$ $P<.001$ (小中全体)

応より以上に、仲間集団の許容的ないしは傍観的雰囲気強く影響しているのかもしれない。

③自分

過去実際に行っていたいじめへの対応行動を具体的に問うのではなく、「もし学校で誰かがいじめられているのを見たら、あなたはどうしますか」という形で、子供たち自身の対応行動への“構え”を質問した。選択肢は、
 1) 自分とは関係ないので、何もしない。
 2) 助けてあげるべきだと思うけど、何もしない。
 3) なんとかして助けてあげようとするの3つである。

小、中別に検討した学年差は有意ではなかったが、年齢段階が上がるにしたがって「なんとかして助ける」が減少し、「なにもしない」が増加する傾向があり、結果、極めては

っきりした小中の隔差が検出された ($\chi^2=93.33(2)$ $P<.001$)。中学生の半数以上、小学生と比較して約1.5倍の63.5%が助けるべきと思いつつ傍観的であり、自分とは関係なしとする者も16%と小学生の5倍以上に増加している。「なんとかして助ける」は、小学生54%、中学生20%であった。性差は、図12にみるように小学生、中学生のいずれについても有意であったが、その差の在り方は異なっている。すなわち小学生での性差は主として「なんとかして助ける」の選択率の差(男子<女子)に表れているが、中学生の場合は、女子の反応が「助けるべきだが何もしない」という傍観的なものに集中するという形で生じている。

図13、図14は、児童生徒自身の「いじめへの対応の仕方」が明らかに周りの先生や友達の行動についての認知と関連するものであることを示唆している。いじめを目撃した時に自分とは関係なしと無関心、傍観の態度をもつ子と、なんとかして助けようとする態度をもつ子とを比較すると、後者に、先生や友達もいじめを止めると見ている子が多い。こうした態度が周囲の人達の実際の行動の観察から形成されたものであるのか、あるいはこう

図12 いじめへの対応：自分
(いじめを見たらどうするか)

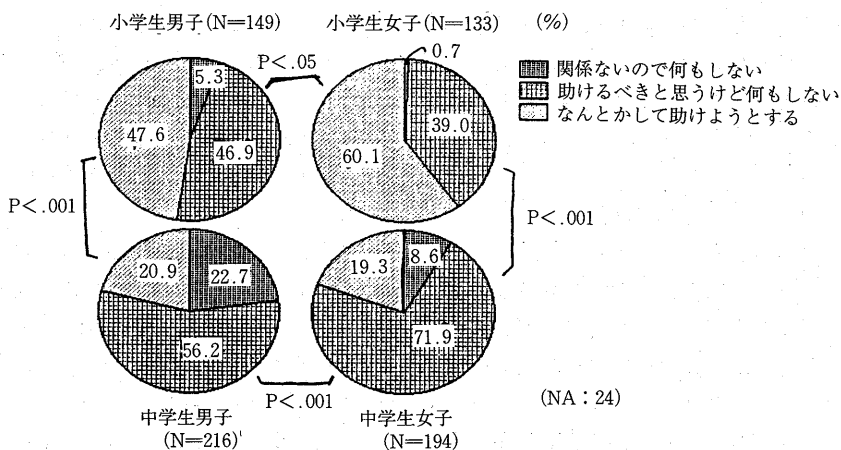


図13 いじめへの対応(自分)×教師の対応

[小中全体]

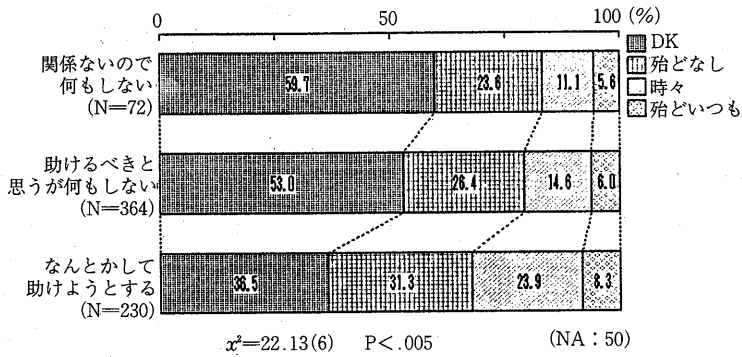
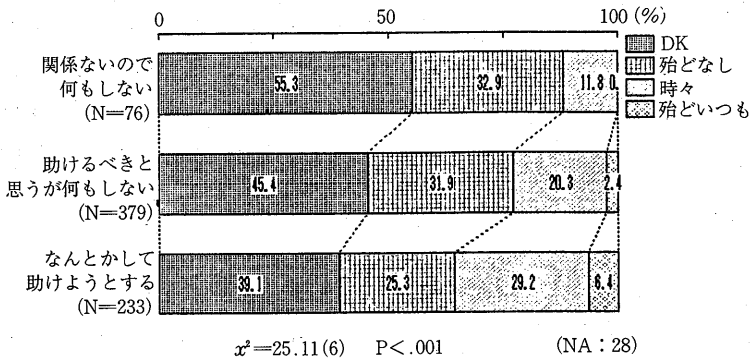


図14 いじめへの対応(自分)×友達の対応

[小中全体]



した態度が周囲の人達の行動についての認知の在り方に影響を与えているのか判断する手がかりは今はないが、いずれにせよ教師のいじめへの対応行動の在り方、いじめを制止しあう学級集団作りの重要性を示唆する結果といえよう。

(4) 「いじめ行為」への態度

① 「いじめ」観

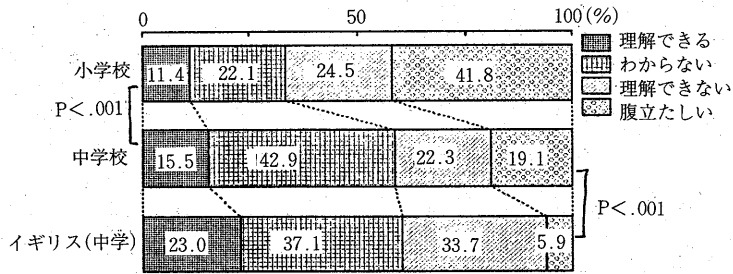
「いじめをする人をどう思いますか」という質問で、児童生徒のいじめ行為に対する考え方、感じ方を、1) なぜいじめをするのか理解できる、2) わからない、3) なぜいじめをするのか理解できない、4) いじめをして

いるのを見ると嫌な腹立たしい気持ちになるの4つの選択肢を示してたずねた。

「いじめ」観に於ける学年差は、小学生段階で有意であり ($\chi^2=8.20(3) P<.05$) 中学生段階には見出されなかったが、全体として学年が上がるにつれいじめ行為への否定的態度が減少し、許容的になっていく傾向がみられた。

図15によると、小学生の場合、「なぜいじめするのか理解できない」「嫌で腹立たしい」のいじめ否定の態度表明者が半数を越えている (66.3%) のに比し、中学生では「理解できる」「わからない」の容認ないし中立的な反応が過半数を占めている。また不快、腹立

図15 「いじめ」観



たしいという感情的否定的の態度を示す子が多いのが小学生の特徴である ($\chi^2=54.78(3)$).

イギリスS予備調査の結果から日英比較をすれば、イギリスの中学生に認知的レベルでいじめ行為への態度を保持している傾向が見て取れる。許容的(容認, 中立)か否定的かの2分類に従えば日英ほぼ同率であるが、いじめ行為が理解できるか否かの態度表明がイギリスの生徒に多い ($\chi^2=31.35(3)$).

② 「いじめ」への行動傾性

中学生に対してのみ、「もしあなたの嫌いな子がいじめられていたら、あなたはそのいじめに加わると思いますか」という質問項目が付加えられた。その結果が図16である

「いじめには加わらない」と答えた生徒は、全中学生の約3分の1である。同一の項目を用いた昨年11月施行のイギリス、シェフィー

ルド全域調査では、60%の子がいじめないと答えている事を考えると(いじめに加わる18%), 予想以上に低い数値と思われる。

性差, 学年差ともに0.05%水準で有意。高学年になるにつれ、いじめないという反応が増加し、女子より男子にいじめるとする者が多い。

③ 態度の内的一貫性

いじめ観を容認(理解できる), 中立(分からない), 否定(理解できない, 腹立たしい)の3つに分類し、いじめ行動傾性ととの関連を分析した結果が、図17である。これによるといじめ観に対応しての行動傾性の偏差はあきらかで、本調査の中学生のいじめに関する態度の内的一貫性が示唆されている。いじめ行為一般に対し許容的考え方をもつ生徒の60%近くが、自分の嫌いな子のいじめには加

図16 いじめ行動傾性

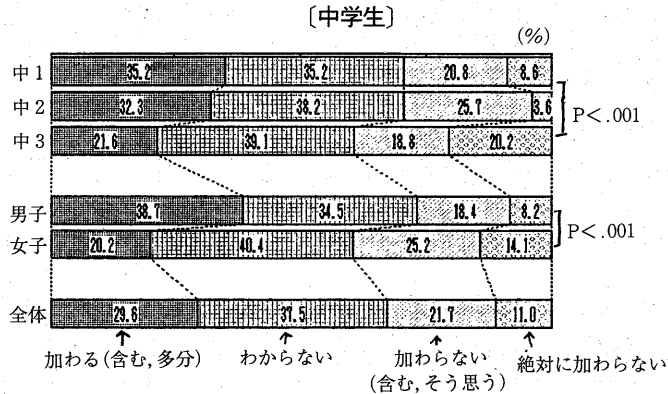


図17 いじめ観×いじめ行動傾性

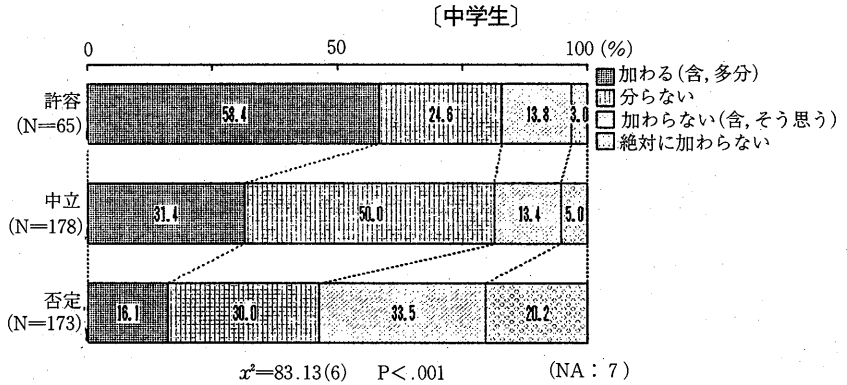


図18 いじめ観×いじめへの対応 (自分)

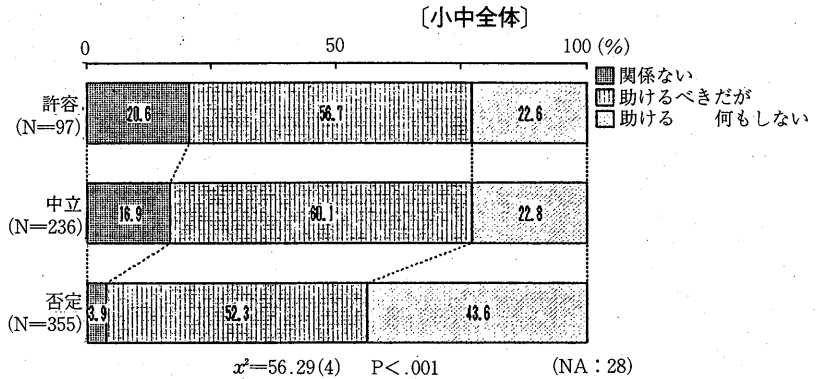
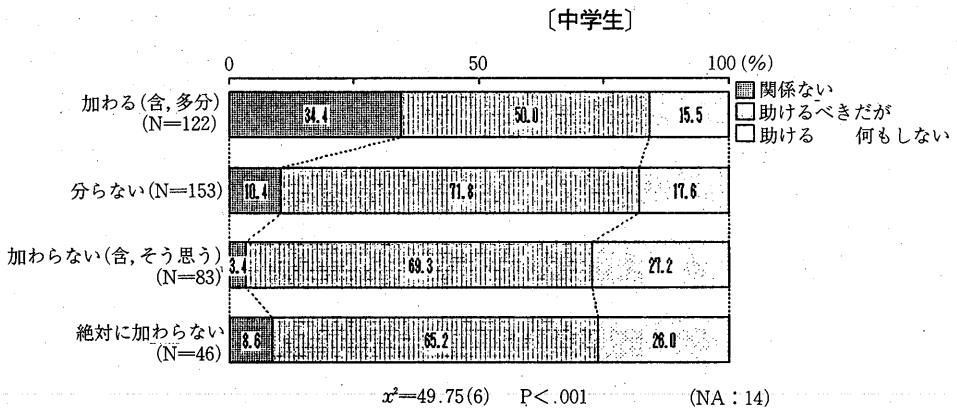


図19 いじめ行動傾性×いじめへの対応 (自分)



担すると答え、絶対に加担しないと答えた生徒は、65名僅か2名であった。

④いじめへの態度と対応行動

いじめへの態度(認知感情、行動傾性)は、当然、いじめを目撃した時の対応の仕方を規定するであろう。その様相が図18、図19に示

されている(図18の分析対象は全データ, 図19は中学生のみ)。予想通り, いじめられている友達をみたらなんとかして助けようとする子の率は, 否定的にいじめ観をもつ子, いじめ性向の低い子に高く, 自分とは関係ないから何もしないとする子の割合は, 許容的にいじめ観, 高いいじめ性向の子に高い。

(5) まとめにかえて

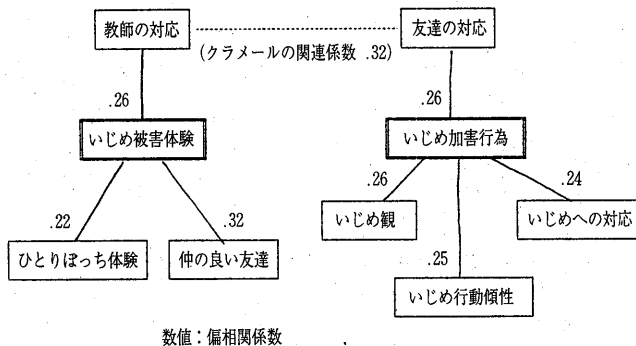
本調査は, ヨーロッパで使用された質問紙をそのまま使い, 通文化的な視点からのいじめ状況の大雑把な把握と比較を行う為の試みとして施行されたものであり, いじめ現象の関連要因を深く探究すべくデザインされたものではない。しかしながら本調査に於いても

表5 いじめ被害・加害頻度との関連要因(数量化I類分析)

[中学]

項目	カテゴリー	いじめの被害頻度		いじめの加害頻度	
		数量	偏相関係数	数量	偏相関係数
休み時間の好悪	1. きらい	-0.109	0.045	0.028	0.061
	2. どちらでもない	0.017		-0.142	
	3. 好き	-0.035		0.041	
	4. とても好き	0.027		-0.002	
仲の良い友達	1. いない	1.886	0.323 ①	-0.061	0.101 ⑤
	2. 1人	0.339		-0.377	
	3. 2人か3人	0.076		-0.135	
	4. たくさんいる	-0.095		0.047	
休み時間のひとりぼっち体験	1. なし(含む, 1, 2度)	-0.064	0.222 ③	-0.003	0.072
	2. ときどき	0.283		-0.108	
	3. 週1度以上	0.980		0.283	
教師のいじめへの対応	1. わからない	-0.104	0.258 ②	0.038	0.078
	2. 殆どとめない	0.319		-0.121	
	3. 時々とめる	-0.242		0.055	
	4. 殆どいつもとめる	0.097		0.041	
友達のいじめへの対応	1. わからない	0.002	0.103 ④	-0.265	0.262 ②
	2. 殆どとめない	-0.041		0.208	
	3. 時々とめる	0.110		0.242	
	4. 殆どいつもとめる	-0.307		0.175	
いじめへの対応:自分	1. 関係ないので何もしない	0.078	0.047	0.486	0.240 ④
	2. 助けるべきと思うが何もしない	-0.012		-0.122	
	3. なんとかして助けようとする	-0.032		-0.003	
いじめ観	1. なぜいじめのか理解できる	0.128	0.078	0.547	0.263 ①
	2. わからない	-0.039		-0.112	
	3. なぜいじめのか理解できない	-0.020		-0.055	
	4. 嫌な腹立たしい気持ちになる	0.005		-0.129	
いじめ行動傾向性	1. いじめに加わる(含む, 多分)	-0.039	0.069	0.307	0.248 ③
	2. わからない	0.062		-0.004	
	3. 加わらない(含む, 多分)	-0.009		-0.295	
	4. 絶対に加わらない	-0.080		-0.252	
重相関係数		0.6088		0.5390	

図20 いじめ事件の背景



「いじめ」と強く結びつく要因がいくつか示唆されており、いじめ加害行為、被害体験をめぐる実相の一端を検討する事が出来そうである。本調査の目的を越えるものではあるが、今後の研究および「いじめ」克服の実践的取組に資するため若干の分析、考察を行った結果を報告したい。

表5は、中学生のデータについていじめ被害体験、加害行為との関連要因、関連の強さを検討する為に数量化Ⅰ類の分析を行った結果であるが、これによっていじめ被害、加害体験がそれぞれ全く異なる背景をもつものであることが理解される。その様相を図式化して図20に示す。

①いじめ被害体験

本調査で見出されたいじめ被害体験と関連する要因は、既に報告したように学校生活への適応状況の指標とも言うべき「休み時間の好き嫌い」「仲の良い友達の数」と間接的いじめと見做される「休み時間の一人ぼっち体験」の3変数、および「教師のいじめへの対応」の4つであったが、中学生のみのデータについての数量化Ⅰ類分析でもこれら諸変数が「休み時間の好き嫌い」を除いて、強い関連要因である事が確認されている。(小学生のデータについての同様の分析では「休み時間の楽しさ」変数が、偏相関係数0.28で第1の強度をもつ関連変数となっており、中学段階

とはいづらく異なるいじめ問題状況の存在を示唆している)。「仲よし」変数と「ひとりぼっち」変数とはいわば学校での孤立状態を示す指標である。そしていじめられ側の子供たちの関心がもっぱら教師に集中している様に見えるのも、いじめ被害者対策を考える上で重要な意味をもつであろう。いじめられ側の生徒たちは、友達の対応に関してはさほど有意に特徴的な反応傾向を示していないが、教師に関して、先生はいじめを止めないと見る傾向を顕著に示しているのである。17名の重度のいじめを受けている中学生のうち「とめる」と答えた生徒は、一人もいない。情緒的な言い方を許して貰うならば、ここに読取るべきは「密かに教師の救いの手を求める孤独な子供たち」といういじめられっ子のプロフィールであり、いじめられ側にある子にとっての「いじめの日常化」という事態の存在ではないだろうか。

②いじめ加害行為

表5と図20によればいじめ加害行為に関連する変数は、「いじめ観」「いじめ行為傾性」「対応行動への“構え”」の態度変数と「友達の対応行動」である。その内容を図21、図22、図23によってみると、週1度以上の頻度のいじめ加害体験を持つ生徒は、その半数がいじめ行為許容の態度の表明者であり、82%が嫌いな子がいじめられていたら自分も加わ

図21 いじめ加害体験×「いじめ」観

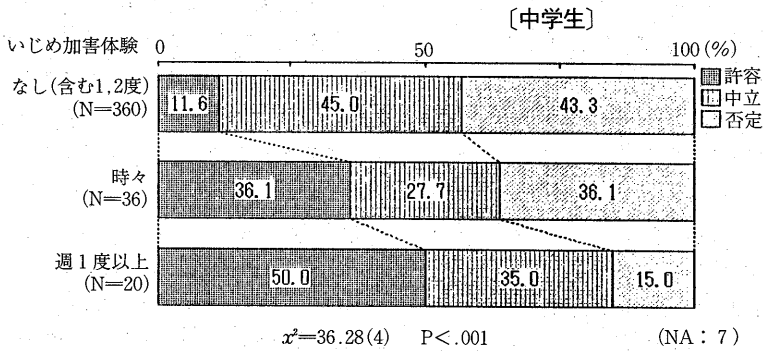


図22 いじめ加害体験×いじめ行動傾性

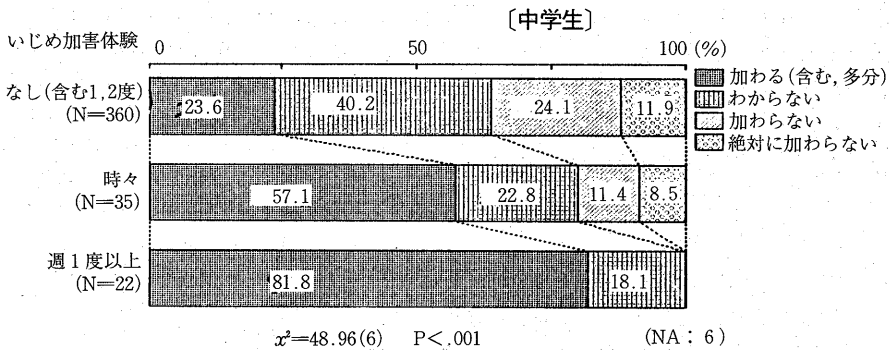
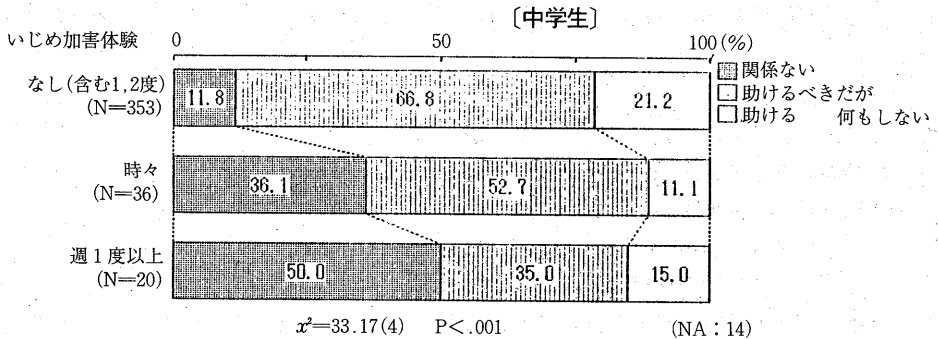


図23 いじめ加害体験×いじめへの対応(自分)



るとし、50%がいじめを目撃しても関係ないから何をしないという態度を持つ。また既に考察したように、その61%が友達はいじめをとめないと答えている(表2)。

以上の結果は、教師を中心とするいじめを

制止し合うクラスづくりが、いじめ行為解消のための最要点であることをあらためて示唆しているといえよう。そしてすでに指摘したように、こうしたクラスの在り方が、単に今起きているいじめ行為を抑制するという意味

に留まらず、子供たちを安易にいじめへと向かわせるいじめへの許容的、傍観的な態度の形成を防止するあるいは改変する重要なファクターでありうる事に注目すべきであろう。

Ⅲ. 結 語

ここ数年来の「いじめ問題」に対するイギリスでの実践的取組において、シェフィールド・サーベイ・サーヴィス計画は、それがいじめ状況の客観的自己認識を軸に展開している点では注目すべきものと思われる。本稿で報告した日英比較調査は、そのシェフィールド調査と同一の尺度を用いる事で我々自身の客観的自己認識を深めることを目指した探索的試みである。埼玉県の小中4校のいじめ問題状況は、いじめ被害体験率で見ると限り低レベルにあると位置づけられ、昨今の事態は鎮静化したとの一般認識を裏付けるものであったが、それと同時に、いじめ加害体験率の高さ、イギリスより遥かに高い「いじめ行為」へのレディネス、許容的傍観的態度、教師の介入の少なさなど楽観を許さない事態の存在も明らかにされた。今回の調査はサンプル数の少なさ、同一地域の同一規模の対象校という限界を持つものではあるが、以上の様な発見は今後の我が国でのいじめ対策に生かされるべきと思う。

残された課題は、対象地域、対象校の拡大である。直接比較可能な大量データの蓄積が、いじめ問題の発生と地域的特性、学校、家庭環境要因などとの関係を明らかにするであろうし、さらにそれを通文化的比較の視野に置くことで「いじめ問題」の普遍的側面と独自性の認識も可能となるのである。こうした研究上の課題に加えて、イギリスでの試みと同様、本研究で使用されたスケールの実践的活用を考える事も今後の課題である。

稿を終えるに当たり、調査校の依頼に御尽力下さった桶川市K中の坂井貞雄先生、調査実施に御協力下さった諸先生方、イギリスの情報や調査票、データなどの資料を提供して下さい下さったシェフィールド大学のP. K. Smith教授に深謝したい。

参考文献

- 1) Valerie E. Besag : Bullies and Victims in Schools, Open University Press, 1989.
- 2) E. Roland & D. lane(eds) : Bullying An International Perspective, David Fulton Publishers, 1989.
- 3) D. Tattum & D. lane (eds) : Bullying in Schools, Stoke-on-Trent, 1989.
- 4) C. Arora : Bullying-action and intervention, Pastoral Care, September, 44-47, 1989.
- 5) Y. Ahmad & P. Smith : Behavioural Measures ; bullying inschools, Newsletters of Association for Child Psychology and Psychiatry, 1990.
- 6) Des Sheffield Bullying Project NEWS-LETTER No 2, May 1991.
- 7) P. Smith & D. Tompson (eds) : Practical Approaches to Bullying, David Fulton Publishers, 1991.
- 8) P. Smith : The Silent Nightmare bullying and Victimisation in School Peer Groups, The Psychologist No. 4, 1991,
- 9) 森田洋司, 清水賢二 : いじめ-教室の病, 金子書房, 1986.
- 10) 菅野盾樹 : いじめ=〈学級〉の人間学, 新曜社, 1986.